The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

コントゥルの『大中観他空説手引』について

槇　殿　伴　子

1．はじめに

本稿は，チベット仏教カギュ派のコントゥル・ヨンテンギャンツォ（Kong sprul Yon tan rgya mtsho，1813–1899）著の『汚れなき光を有する金剛月という名の大中観他空説手引』（*gzhan stong dbu ma chen po'i lta khrid rdo rje zla ba dri ma med pa'i 'od zer zhes bya ba*，以下，『手引き』と略す）を取り上げ[1]，その読解を通して，彼の大中観他空説を理解することを意図する．コントゥルはこの著を理論と実践の二つの側面から記している．本稿では，コントゥルの『手引き』の科文（*sa bcad*）に従い，その内容を紹介する．

2．中観他空の起源

コントゥルは，中観他空の起源を（1.1）「一般的」（*spyir*）と，（1.2）「特別」（*khyad par*）の二つに分ける．（1.1）一般論として，三法輪と了義・未了義の区別を説き，第一法輪を未了義，第二法輪を了義・未了義のどちらでもよく，最終法輪を了義とし，この区分は『解深密経』に従っていると説く[2]．第二法輪が「無を無として世俗諦の現象界を示した」（fol. 1b5–6）のに対し，最終法輪は，「有を有として勝義の空の在り方を示した」（fol. 1b6）が，この二法輪の意図するものは同じであるとラトナーカラシャーンティが承認したと述べる（fols. 1b6–2a1）．次に，中観他空の経典と始祖達が説明される．他空の基盤となる典籍は，最終法輪の了義としての如来蔵二十経典（*'khor lo tha ma nges don snying po'i mdo sde nyi shu*）[3]，「弥勒の五法」，龍樹・無着の典籍であり，「ス・ガウェドルジェ（gZu dGa' ba'i rdo rje），ツェン・カワォチェ（bTsan Kha bo che）から始まって，今日（コントゥルの時代）に至るまで，チベットで，中観他空の様々な説明の伝統が現れた」（fol. 2a1–2）と述べる．中観他空の三大祖師としてカギュ派のランジュン・ドルジェ（Rang byung rdo rje，1284–1339），ジョナン派のドルポパ・シェーラプギェルツェン（Dol po pa

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Shes rab rgyal mtshan, 1292–1361)，ニンマ派のロンチェンパ・ディメウーセル（Klong chen pa Dri med 'od zer, 1308–1363）を挙げ，カギュ派のカルマパ七世（1454–1506)，サキャ派のシャーキャ・チョクデン（Zi lung Paṇ chen すなわち，Śākya mchog ldan, 1428–1507)，ジョナン派のターラナータ（Tāranātha, 1575–1634)，カギュ派のシトゥ・パンチェン・チュキジュンネ（bsTan pa'i nyin byed すなわち，Si tu Paṇchen Chos kyi byung gnas, 1700–1774）の典籍を中観他空の見解を支持するものとする．さらに，「(真の）存在の在り方を聞・思・修の結合した方法を通して誤り無く見る凡夫と，高貴な者たちの究竟の意図はこれ（すなわち，中観他空）のみである」(fol. 2a5）と述べる．次に，「特別な起源」(1.2）は，「甚深な手引き」(*zab mo'i lta khrid*）の起源であり，それにも二つある．すなわち，(1.2.1)「共通な系譜」(*thun mong pa*）は，マイトリーパからラトナヴァジュラとサッジャナに続く『宝性論』の相伝の系譜であり，(1.2.2)「特別な系譜」(*thun mong min pa*）はカギュ派のマルパ（dMar pa, 1012–1097）に遡る，顕密双運の特別な大印（*Mahāmudrā*）の系譜であり，この二者のうちの「共通な系譜」を『手引き』で説くべきものと述べる（fols. 2a5–2b1)．

3．『手引き』の本論

コントゥルは，『手引き』の本論を（2.1)「顕教自身の髄」(*mdo lugs rang rkang*）と，(2.2)「それ（顕教）が甚深な密教の体系と連携する方法」(*de sngags lugs zab mo dang 'brel ba'i tshul*）の二つに分け，(2.1）顕教自身の髄はさらに，(2.1.1)「理解すべきこと」(*go bar bya ba*）と（2.1.2)「それを実践する方法」(*de nyams su blang ba'i tshul*）の二点から説明される．(2.1.1)「理解すべきこと」の中で，中観が二つに分けて説明される．まず，一つ目は，「無自性派」(*ngo bo nyid med par smra ba rnams*）の中観である．この無自性派にとって，空性は「兎の角」や「石女の息子」のような全く存在しないものである（fols. 2b5–3a3)．ここで，コントゥルは大中観自空派の次の二例の誤りを指摘する：(1）或る者は，概念と分析（によって到達した）下級の空(性)を法性と（見なして）自惚れており，「我々のような（見解）こそが大中観であり，他の者全部は間違いである」（と考え，）道から外れる（fol. 3a3–4)；(2）或る者は，自性が心（*blo*）は超えつつも，（真には）解放されず，生成と消滅（を繰り返す様を）数えることを大印と錯誤して，確固とした体験の基盤から逸れる（fol. 3a4–5)．

次に，第二の中観は「弥勒の法に依拠する瑜伽師たち」(*rnal 'byor spyod pa byams chos la brten pa dag*）であり，これが大中観他空派である．しかし，瑜伽行派は「不

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

二智」(*gnyis med ye shes*) を確立していないと批判されている (fol. 2b3–5) ので，大中観他空派とは区別されている．まず，準備段階では，第二法輪の典籍を用いて戯論を断つ (fol. 3a6–7) が，できないなら，「「弥勒の五法」か『宝性論』(Q, nos. 5525, 5526; D, nos. 4024, 4025) のみに従事する必要がある」(fol. 3a7) と説く．コントゥルは，「所取能取の無い智慧」(*gzung 'dzin gnyis stong gi ye shes*) を「仏から衆生まで一切に遍く存在する如来蔵，法性，自性清浄心，客塵にまみれず始源より無垢なものであり，勝義の存在の在り方であるものと如実に知って，その中で瞑想等至することが「弥勒の法」の真意である」(fol. 3b4–5) と述べる．

次に，(2.1.2)「訓練の方法」は，(2.1.2.1)「準備段階」(*sngon 'gro*)，(2.1.2.2)「瞑想実践」(*dngos gzhi*)，(2.1.2.3)「瞑想後」(*rjes*) の三つに分けられる．準備段階は，第一法輪に合致し，四法印（諸行無常，一切皆苦，諸法無我，涅槃寂静）の偈頌を唱える．瞑想実践はさらに三分される．最初に，帰依 (*skyabs 'gro*) と発菩提心 (*sems bskyed pa*) によって「特別の大乗の道」(*theg chen thun mong min pa'i lam*) に入る (2.1.2.2.1)．帰依のためには『楞伽経』(10.750–752) を，発菩提心 (*sems bskyed pa*) には，『楞伽経』(10.753) を唱える (fols. 4a5–b1)．第二の段階は，第二法輪に合致して行われ，座禅を組み，三解脱門（空，無相，無願）の偈頌を唱える (fols. 3b7–4a5) (2.1.2.2.2)．第三番目に，第三法輪と金剛乗に合致して行われる (2.1.2.2.3)．典籍に通じていない場合にはドルポパの『了義の海』(*Ri chos nges don rgya mtsho*) の講伝を受け，「心の本性」(*sems kyi ngo bo*) を「最勝の相を備えた空性」(*rnam kun mchog ldan gyi stong pa nyid*)，「自性清浄心」(*rang bzhin gyi 'od gsal ba*)「如来蔵」(*de bzhin gshegs pa'i snying po*)，「空性」(*stong pa nyid*)，「大印」(*phyag rgya chen mo*)，「我」(*a haṃ*) と同定する (fol. 5a3–4)．さらに，ターラナータの言葉を唱える (fols. 5a7–b3，原典不明)．コンチュルは『楞伽経』(10.256–257) を引用し「錯誤した世俗諦を唯心として理解することは無相（無外観）中観 (*snang med dbu ma*) を通して見，それをも超えて，有相（有外観）中観 (*snang bcas dbu ma*) を用いて誤りなき真実の様態に入らなければならない」(fol. 5b3–5) と註釈する．さらに，如来蔵が一切衆生の中に存在することが強調され (fols. 5b5–6a1)，この如来蔵説の教証として，『宝性論』(1.28, 1.96–97, 1.155, 1.51cd, 2.3, 25, 2.38)，『涅槃経』から四波羅蜜の一節[4]，『現観荘厳頌』(5.21; Q, no. 5184; D, no. 3786，あるいは『宝性論』1.154) が引用される．「清めの基盤」(*sbyang gzhi*) は如来蔵，「清められるべき対象」(*sbyang bya*) は客塵，「清めの果」(*sbyang 'bras*) が法身である (fol. 6b5–7)．

次に，瞑想の休憩時に行う活動が説明される (2.1.2.3)．この時間に如来蔵二十

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

経，『宝性論』，ドルポパの『了義の海』などを読解し，さらに，「発達種姓」(*paripuṣṭagotra, rgyas 'gyur gyi rigs*)[5] を発達させるために，功徳を積む（fol. 8a2–4）．教証として『宝性論』（1.3, 3.1, 4.1, 5.25）が引用される．次に，この大中観他空が「密教と結びついて訓練される方法」（2.2）が，（2.2.1）「理論」と（2.2.2）「実践」の二つの点から説かれる．理論面で，如来蔵が説かれ（fol. 9a1–5），実践面で，『ヴィマラプラバー』[6] と『時輪タントラ』[7] を引用し，「自分自身の中に存在している本初仏が現前する」（9b5）と述べる．以上で見たように，大中観他空の実現のための実践においては，三法輪すべてを用い，第一法輪から段階的に上昇していく．大中観他空の実践を通して，一切衆生に存在する如来蔵の客塵を浄めて，如来蔵が法身として自ずから顕現することを目指す．

4．大中観他空の利益と系譜

コンチュルは大中観他空が如来蔵経を信用しないことから生じる不利益（地獄に落ちるなど）を翻す助けとなると説き，利益については『宝性論』に説かれていると述べる（fols. 9b6–10a2）．さらに，『解深密経』[8]，『央掘魔羅経』[9]，『大般涅槃経』[10] などの如来蔵経典を引用してそれらの経典の功徳を説き，ドルポパの言葉を引用する（fol. 11a5–7，原典不詳）．最後に，コントゥルは他空の系譜を述べる．ターラナータ以前の他空の系譜はターラナータの『甚深な中観他空の系譜の嘆願』(*Zab mo gzhan stong dbu ma'i brgyud 'debs*)[11] に従うものとし，それ以後は，ギェルツァプ・ナルタンワ（rGyal tshab sNar thang ba，不詳），ロジュナムギェル（Blo gros rnam rgyal，不詳），ナクワンチンレ（Ngag dbang phrin las，不詳），クンサンワンポ（Kun bzang dbang po，不詳），ツェワンノルブ（Tshe dbang nor bu，1698–1756），テンペーニチェ（bsTan pa'i nyi byed，すなわち，Si tu Paṇchen Chos kyi byung gnas，1699/1700–1774），ドゥドゥルドルジェ（bDud 'dul rdo rje，カルマパ 13 世 1733/1734–1797/1798），ジャムゴンゾクペーサンギェ（Byams mgon rdzogs pa'i sangs rgyas，不詳），ペマニンチェワンポ（Padma nyin byed dbang po，1774–1853）と続いている．コントゥル自身は，ペマニンチェワンポから，「カルマパ 13 世の教科書に準拠して，祝福と『時輪タントラ』の成熟解脱を受けて」，大中観他空の教えを伝授されているが，大中観他空の系譜は他にもある，と述べている（fols. 11a7–b2）．

1）コントゥルには「五蔵」(*mDzod lnga*) として知られる五大全集がある．『手引き』は「五蔵」のうちの『貴き訓示の蔵』(*gDams ngag rin po che'i mdzod*) と『広大語蔵』(*rGya*

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

chen bka' mdzod）に所収されている他に，ニンマ派の *bKa' ma shin tu rgyas pa*（*Kaḥ thog*）にも所収されている．本稿では『貴き訓示の蔵』所収のテクストによって，本文中に該当箇所を示した．

2）『解深密経』（Q, no. 774, *ngu*, fols. 25b8–27a7; D, no. 106, *ca*, fols. 24b5–25a4）は第一と第二法輪両方を未了義とし，第三法輪を了義とする．

3）如来蔵二十経は，たとえば，Tshe dbang nor bu（1698–1755）の *bKa' tha ma don dam rnam par nges pa nges don snying po'i mdo'i dkar chag bsam 'phel nor bu'i 'phreng ba*（In *Tshe dbang nor bu'i gsung 'bum*, vol. 5, fols. 1–3, pp. 511–516, Dalhousie, H.P.: Damchoe Sangpo, 1977）に列挙されている．

4）コントゥル『手引き』（fol. 6b2–3）;『大般涅槃経』（Q, no. 787, *ju*, fol. 35b5–7; D, no. 199, *nya*, fol. 34a2–4）.

5）この語と対となる「自然本性種姓」（*prakṛtisthagotra*, *rang bzhin gnas rigs*）は一切衆生が如来蔵を有する理由として言及されている（fols. 5b5–6a1）.

6）コントゥル『手引き』（fol. 9a5–7）; *Vimalaprabhā*（Q, no. 2064, *ka*, fol. 5a8–b1; D, no. 1347, *tha*, fol. 110a6–7）. Cf.『六支瑜伽』（Q, no. 2102, *nga*, fol. 322b2–5; D, no. 1387, *pa*, fol. 285a5–6）.

7）コントゥル『手引き』（fol. 9b2）;『時輪タントラ』（Q, no. 4, *ka*, fol. 125a2–3; D, no. 362, fol. 113a2–3）.

8）コントゥル『手引き』（fol. 10a5–6）;『解深密経』（Q, no. 774, *ngu*, fol. 27b4–7; D, no. 10b, *ca*, fol. 25b1–4）.

9）コントゥル『手引き』（fol. 10b3–4）;『央掘魔羅経』（Q, no. 879, *tsu*, fol. 164a1–3; D, no. 213, *tsha*, fol. 156b3–5）.

10）コントゥル『手引き』（fol. 10b6–7）;『大般涅槃経』（Q, no. 787, *ju*, fol. 92a2–4; D, no. 199, *nya*, fol. 89b2–3）.

11）加納 2010: 14, n. 3.

〈略号〉

D 西蔵大蔵経デルゲ版

Q 西蔵大蔵経北京版

〈参考文献〉

Kong sprul. *gZhan stong dbu ma chen po'i lta khrid rdo rje zla ba dri ma med pa'i 'od zer zhes bya ba*. In *gDams ngag mdzod*, vol. 4, fols. 1–11, pp. 566–586. Delhi: Shechen Publication, 1999.

加納和雄「チョムデンリクレル著『大乗究竟論荘厳華』和訳および校訂テクスト（1）」『高野山大学論叢』第 45 巻，2010 年 2 月，13–35 頁.

（2014 年度～2017 年度科学研究費補助金「基盤研究（C）課題番号 40720751」による研究成果の一部）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

〈キーワード〉 コントゥル（Kong sprul），大中観他空説，如来蔵思想，了義・未了義経

（身延山大学東洋文化研究所研究員）

新刊紹介

林　智康・井上　善幸・北岑　大至　編

東アジア思想における死生観と超越

A5 版・384 頁・本体価格 3,800 円
方丈堂出版・2013 年 3 月

NII-Electronic Library Service